

平成29年度 富山市民 感謝と誓いの つどい

とき 平成29年8月1日(火) 午後1時30分
ところ 富山国際会議場 メインホール

主催／富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

- | | | |
|---------------|----------------|---------------|
| 富山市自治振興連絡協議会 | 富山市社会福祉協議会 | 富山市遺族会 |
| 富山市老人クラブ連合会 | 富山市民生委員児童委員協議会 | 富山市児童クラブ連絡協議会 |
| 富山市母親クラブ連絡協議会 | 富山市PTA連絡協議会 | 富山市小学校長会 |
| 富山市中学校長会 | | |



●三・四年生の部
小学生絵画最優秀賞



「夜景がきれいな かがやく未来」
富山市立大広田小学校4年 野々村 有莉さんの作品

●三・四年生の部
小学生絵画優秀賞



「とやまパークへようこそ」
富山市立三郷小学校4年 林 千聖さんの作品

●三・四年生の部
小学生絵画優秀賞



「自然いっぱい未来の富山市」
富山市立鶴巻小学校3年 杉本 実さんの作品

●五・六年生の部



「遊園地in富山湾」
富山市立山室小学校5年 水落 唯さんの作品

●五・六年生の部



「魚いっぱい富山の観光名所」
富山市立新保小学校6年 長勢 幸太郎さんの作品

●五・六年生の部



「自まんの富山市はハッピーです!」
富山市立三郷小学校5年 土井 つばきさんの作品

富山市のあゆみ展

■日時・場所
7月30日(日) 午前11時～午後6時
7月31日(月) 午前9時～午後6時
8月1日(火) 午前9時～午後4時
富山国際会議場 1F交流ギャラリー

■内容
富山市の歴史の紹介や、市民生活の変遷を写真等のパネルで展示するほか、小学生が描く絵画「未来の富山市」も展示します。

このプログラムは再生紙を使用しています。

「富山大空襲と父の死」

奈良県大和高田市 蛭谷 清作

私は、父亀次郎、母よし、を両親に、昭和十二年五月、富山県婦負郡四方町(現、富山市四方)で生まれた。当時、父は、漁師をしていたが、昭和十五年頃、鮮魚店を開くため、現在も実家のある富山市東田地方町に一家で移り住んだ。その四方から仕入れる新鮮な魚が評判を呼んで、かなり繁盛していたよう、ささやかながらも、それは幸せに過ごしていた。

昭和十六年十一月に始まった太平洋戦争の戦況は益々厳しく、あちこちの戦線で次々と不利な状況が伝えられ、これに伴い我が家にとっても厳しいものとなっていた。

先ず、次兄繁弘は小学校高等科を経た後、自ら少年志願兵として、京都府舞鶴の海軍に入隊した。その後、続いて、父とともに重要な家の働き手だった長兄繁雄も、兵員増強号令のもと、召集され同じ舞鶴に行くこととなった。(尚、繁弘は、昭和二十年二月、当時はやっていた伝染病がもとで、僅か十五歳で入院中の舞鶴海軍病院で亡くなってしまった。)

それは、八月一日夜遅く、一度は解除になった警戒警報だったが、すぐあとのけたたましい空襲警報のサイレンが、すべての悲劇の始まりだった。

耳をつんざくB29飛行機の爆音が響き渡り、家中の者全員が飛び起きた。聞けば、すでに富山駅あたりに爆弾、焼夷弾が落とされ、恐れていた本格的な空襲が、ついに始まったのだ。

恐る恐る空を見上げると、一面がまるで真昼間のように明るく、見渡す限り、全ての建物が燃え盛っていた。その火勢が激しく、もう間近に迫ってきていた。このままでは、駄目だと近所の人達とともに我が家の全員も、家から脱出する事となった。

そんな中、父は、「みんな早く逃げられまーウシはここで家を守んがやー」とその頃、父は、前年の冬に、屋根の雪下ろし中、落下し、足に大怪我を負い、動くに不

自由な状態だった。(大きな声を張り上げ怒鳴り出し、みんなを家から追い出した。今から思えば、自分について行ける自信が無く、これでは迷惑を掛けると考えたのだろう。「そんなダラ(アホ)なこと言うたらアカン!」との説得にもかかわらず、奥の部屋にひっこんでしまった。)

やむなく、父を残し、各々防空頭巾を頭から被り、凄い火勢に追われながら、稲荷町方面へと親子共々、手を取り合いながら必死に走り出した。

道路は、火勢から逃げる人で溢れかえり、大人たちの訳の分らぬ大きな叫び声や、多くの子供らの泣き叫び声などで、大混乱となっていた。

その中、無我夢中で走り、目指した一キロ半ほど先の「いたち川」にみんな飛び込んだ。

それからは、川の水を互いに掛け合い、降って来る火の粉を振り払うのにそれは必死だった。途中、流れて来た幾つもの死体などをよけながら、これが本場の地獄絵図と言ったものだ。

殆ど一晩中、川の中に浸かり、その後どれ位の時間がたったか分からないが、明け方になって気がついたら、そこは川の土手の上で、いつときの無事を喜ぶ事ができた。(この時の事を、平成十六年に亡くなった、姉トミ子は生前よく「家で一番体の弱かった清作があんな川の途中でぞぞ生きたもんなやちゃー」と言っていた。)

やがてみんなは我が家はどうなっているものかと、家の方向へ歩き出した。途中の道路は、焼焦げ、その熱さが裸足にはすくこたえた。しかも不発の焼夷弾があちこちに突き刺さっており、傍らには、多くの焼死体も目にした。

漸く、家の付近に辿り着いたが、全く跡形もなく全てガレキの山だった。周りじゅうはまだ火焔がくすぶり、黒煙が噴き出している中、見渡す限り、残った建物と言え、鉄筋建てる大和ビルと電気ビルなど数えるほどしかなかった。又、家の真向ににあった赤十字病院も全く跡形もなく、掘きわには、無念そうに大きく目を見開いたままの、病院関係者や入院中の患者さんと思

われる無数の黒いげの焼死体がころがっており、それは本当に恐ろしい光景であった。

あの原爆投下後の広島、長崎の悲惨な風景をテレビや雑誌などで、よく目にするが、その状況はそれと全く変わらないのだ。

心配した通り、父の姿はそこには見当たらなかった。暫くして、近所の人「あんたこのお父さんが向こうにおられるよ」と言っていたとき、程無く、ススミれで弱り果てた、紛れもなく生きていた父が姿を見せた。みんな手を取り合せて、再会を喜び、号泣したことは言うまでもなかった。ただ、そのあと、どう行動したか、どんな言葉をかかわしたか記憶にはない。

父は、それから僅か三日後の八月五日、避難先の四方の親戚宅で亡くなってしまった。

まだ、四十九歳の若さであった。直接この戦争で亡くなった訳ではないが、父の死は、紛れもなくこの戦争の犠牲者だと、ずっと今でも私は悔やんでいる。

実は、その四方町も、富山空襲の前、四月十八日に五百戸近くの建物が消失するという大火災が発生したあとで、その影響で、火葬場もなく、やむを得ず、近くのトタン板などをかき集めて、茶毘に付すしかなかった。

母は、この不遇な別れに「父ちゃん堪忍してやー」と大きく泣き崩れた姿を今でも鮮明に覚えている。幼かった私には、ただ酒好きで、近寄り難い威厳のある父との印象しかなく、この空襲のせいで、写真一枚すらも残っていない。そんな記憶には薄い人だったが、今となっては、その後の父との会話か叶う事が無く、心底、無念で悔しくて悔しくて淋しい限りである。

互いがいがみ合い、やがては国、そして国民全部が不幸でみじめに陥る戦争は永遠に起こさない、平和な世界であり続けたいもの、と心から願わずにはおれない。

この苦しく、悲しい戦争の悲惨な自身の体験を、一人でも多くの人に伝えねばと思いで、いっしょである。

平和で居られる今だからこそ…

「古きものと新しいものの共存」

富山市立芝園中学校三年 山内 そよ

二年前、北陸新幹線が開通しました。各地から観光客が増え、富山駅前が賑やかに変わった気がします。たくさんの方が改札口から出て来る姿をよく見るようになりました。駅前で写真を撮ったり、富山の名物の鱒の寿司やホタルイカを珍しそうに眺めたりしている人もいます。富山の良さを各地の人が知り、地元へ帰り他の人にそれを伝える。それを聞いた人が観光客として富山を訪れる。そうやって賑わっていく富山を想像すると私はすごく嬉しい気持ちになります。東京のように有名にはならなくても、富山の良さを分かってくれて、何度も足を運んでくれる人が一人でも増えたらそれだけでいいと思つています。そのために、私自身が富山の歴史や文化を学び始めました。

富山が発展していくにつれ、街には高いビルや大きな建物が並ぶようになりました。駅前には活気づいてきました。私は少し悲しい気持ちになることがあります。それは、私の大好きな立山が見えづらくなつてきたからです。富山県の多くの学校の校歌で「立山」という言葉が使われていると聞きましたが、その立山が見えづらくなり、自然よりも、発展した街並みが注目されるようになった気がします。立山は私たち富山県民の誇りであり、宝です。富山を訪れた観光客が、栄えた繁華街やビルで用事を済まし、立山を見ることなく去ってしまうのではないかなと思うと、寂しさを感じます。

建物や科学技術の発展によって富山が栄えていく一方で、過去の歴史や自然の姿が見えなくなっているように



城址公園内にある戦災復興記念像(天女の像)

感じます。今私たちが立っているこの地面や、富山駅や高層ビルも、数十年前には焼野原だったと、近所のおばあちゃんに聞きました。

「今暮らしている町は、富山大空襲ですべて焼野原になつていたんだよ。亡くなった人が大勢おられて、たくさんの方が地面をはいつくばつていた……。」

おばあちゃんはとても優しく、暗い表情でした。その表情がまるで戦争の悲惨さを表しているようで、私は言葉が失いました。豊かな生活が実現し、新しい建物が建てられても、戦争を経験した人の心の奥に、空襲の記憶は深い傷跡として残つているのだと痛感しました。富山の自然や文化、そして、歴史の記憶が失われていくことのないよう、次の世代に伝えていくことが、私たちの使命であり、大切なふるさとへの恩返しになると考えるようになりました。

私は自分が生まれた富山という土地を愛し、この地で生きられることに感謝しています。富山の街並みはこれからも変わり続けていくと思いますが、富山に対する思いは、永遠に変えたくありません。戦争で亡くなった多くの人の冥福を祈りながら、今ある富山の良さを、より多くの人に語り継いでいきたいです。

「尊い富山」

富山市立芝園中学校三年 會田 陽貴

今年の修学旅行で、僕たちは広島を訪れました。原爆ドームや平和記念資料館に行き、命の尊さについて学んできました。また、原爆がもつ破壊力を、コンピュータシミュレーションで再現した映像を見て、核兵器の脅威を感じました。戦争という悲惨な出来事は二度と繰り返してはいけないと思ひ、今ある平和はとても尊いものだと痛感しました。

僕たちが住んでいる富山は、豊かな自然に囲まれており、美味しい食べ物もたくさんある素晴らしい場所です。そして、僕はそんな富山が大好きです。今ある僕の大好きな富山が、昔からずっとこの状態だったと僕は信じていました。しかし、社会科の授業で、歴史について学んでいるとき、先生に富山大空襲の話聞いてから、僕の富山に対する思いは変わりました。

一九四五年の八月一日、二千人以上の方が亡くなる富山大空襲があり、当時の市街地はほとんどが焼失し、一面焼野原となったそうです。その空襲の被害は、原爆が落とされた広島・長崎を除く大都市の中では最大で、富山に大きな傷跡を残しました。このことを知った時、僕は事実を受け止めきれず、信じられないという気持ちでした。今のよ

うな平和な生活からは、当時のことが全く想像もつきませんでした。また、僕たちが今こうして平和に暮らしていることは、とても幸せなことだと感じています。

大きな被害を受けた富山がここまで復興できたのは、空襲にあつてたくさんの方の命が奪われても、希望を持ち続けた先人達がいからだと思ひます。だから、僕は先人達に言葉では表せないほど、感謝しています。

今、富山は様々な素晴らしい魅力があふれています。立山、鱒の寿司、ホタルイカ、ライトレール、新幹線の開通。しかし、あの悲劇が再び起こると、大切な富山が一瞬で失われてしまいます。

「歴史は繰り返す」とよく言われますが、絶対に、二度と繰り返されることのないよう、一人一人が平和を願わなくてはならないと思ひます。

僕たちのふるさと富山が、先人達によつて築き上げられてきたことを忘れて、後世に語り継いでいく使命があると感じています。平和を大切にしてい、自分にできる小さなことから始めていき、将来の富山の発展に貢献していきたいです。

「伝え、つなぐ」

富山市立東田中学校三年 宮田 真理子

私は小学四年生の時に富山に引越してきました。その前には岩手県に住んでいた、岩手県も自然あふれるいい所だった。でも富山も岩手に負けないくらいいい所だと感じた。

そう思った理由は、空気感だ。この場所より空気が違うと思った。富山を囲むようにある山々の澄んだ空気。そして、人々の活気があふれ、よい町を作ろうという気持ちの伝わる空気。これらは作ろうと思つてできるものではない、昔からつないできたものだった。

修学旅行で、私は初めて広島に行つた。特に印象に残つたことが、碑巡りだ。平和記念公園の碑をまわりながら、ボランティアガイドの方の話を聞くというものだった。ガイドの方が被爆者の方が描いた絵などを使い、悲惨な戦争の事実を詳しく説明してくださつた。ガイドの方の話を聞いていると、何回も出てくる言葉に気づいた。それは、「戦争はこんなものではない。戦争の悲惨さは言葉では絶対に伝えきれない。」その言葉には重みを感じた。私は、どんなものを使つて私たちに説明しても、本当の恐ろしさは体験した人にしか分かることができないう。今後、こんな思いをしてほしくないということだと理解

した。またガイドの方は、「本当はこのことを伝えることも嫌で思ひ出すのも嫌なのです。だけど戦争のこととは誰かが伝えていかななくてはいけないから、こういう活動に参加しています。」ともおっしゃっていた。原爆や戦争によって体も傷つけられ、亡くなった方も大勢いらつしゃるが、その方々よりももっと多くの人が現在も心を痛め、消えぬ傷と闘い続けているのだ。そして私たちに、未来のためを思つて伝えてくださっているのだと思つた。

今の富山は、富山に帰つてきて、改めて囲まれる自然、囲まれる人により、便利で不自由なく生活できるいい所になつていると思う。けれど、そのような生活ができるのは、今までに努力してきた方々のおかげであることを忘れてはいけないのだ。それは富山大空襲から今の富山の町を造つてきた人、北陸新幹線を開通するまで努力した人ということだ。私たちはそのような方々のおかげで今の暮らしができています。だから日頃何気ないことでも感謝して生活するべきだと思う。また広島ガイドの方のように私たちも戦争の悲惨さを知つていることだけでも、これからの人たちに伝えていくことが大事だ。そして、今まで努力してきた人のように平和で今よりもさらに発展していく富山を創るため、今の良い空気を残す意味でいくことが、私たちの生きる意味であり目的だと思ひます。

式典



1. 富山市の紹介映像

2. 国歌斉唱

3. 黙とう

4. あいさつ

富山市長 森 雅志

5. 中学生作文最優秀賞発表

富山市立芝園中学校三年 山内 そよ
「古きものと新しいものの共存」

6. 戦災体験談

作 / 蛭谷 清作

朗読 / 声のライブラリー友の会 楠木 知子

7. 代表献花及び一般献花

演奏 / レーベン弦楽四重奏団

第1ヴァイオリン 青木 恵音

第2ヴァイオリン 藤田 千穂

ヴィオラ 嶋 志保子

チェロ 富田 祥